

夜明け前の東北地方をマグニチュード(M)7.4の地震が襲った。東日本大震災以降最大の津波も観測した。被害は小さかったが、原発が地域の安全と安心を脅かしている姿があらわになった。

2016・11・23

## 論説

震源は福島県沖だった。福島第一、第二原発の前に広がる海だ。大震災の際、原発の近くを通る国道6号は一部浸水した。堤防工事が行われているが、まだ完成していない。国道は朝夕、作業員を乗せた車で渋滞する。津波が高くなくてよかった。

福島県いわき市ではガソリンスタンドに車の列ができた。原発からは数十キロも離れているが、原発から放射性物質が放出されるのを恐れた人たちが、遠くに避難できるように給油したのである。

最近の同県沿岸部は、新しい商業施設や宿泊施設ができ、一見、日常生活が戻ったような印象を与える。しかし、原発事故のときの混乱や不安を忘れていなかった。それを象徴する給油の列だった。

第一原発で一時、核燃料プールの冷却が止まった。安全には問題ないと言いつつ、不安を訴える住民はいる。今回の地震は、住民にとって、原発事故はまだ終わっていないことを示した。

東京電力は福島県知事らが繰り返し廃炉を要望しているにもかかわらず、第二原発の廃炉を決めていない。福島復興を言うのなら、廃炉の決定が望まれる。

気象庁は今回の地震を東日本大震災の余震としている。最近、話題にならなくなっていたが、M7前後の余震は、一二年十一月、一三年十月、一四年七月、一五年二月と続いていた。今後毎年一回程度はM7クラスの余震が起きてもおかしくないと言いつつ、余震だけではない。大震災を起した日本海溝よりもさらに東側で、プウターライズ地震という巨大地震の発生を警告する専門家もいる。

日本は地震と火山の国だ。海底で地震が起きれば津波も発生する。首都直下や南海トラフ地震が話題になるが、予想もしない場所で大地震が起きるのにも珍しくない。福島県沖の地震は、私たちへの警告と考えたい。

まずは家族や職場、学校でも、しもときの対応を話し合おう。旅行先だったら、とっついた想像力も働かせよう。

原発は地震などの自然災害の際、複合災害となって被害を大きくする。原発事故のしほは、推進した政治家や企業だけではなく、国民に回っていく。全原発を廃炉にするのが国土強靱化のしほだ。

# やはり不安は消えない 原発と地震

11/23 早稲